

地域イノベーションを促進する協創的ヒアリング手法の研究

——未来創造のためのファシリテーション——

田坂逸朗

(受付 2014年5月30日)

1. はじめに

「イノベーション」という言葉のもとに、強く社会変革が求められている。その実行のための環境づくりも計画され、国家規模での施策化にも着手がおよんでいる。だがしかしそれは現状として、多様な意見の収集に基づいてなされたものか？規制緩和策などのアイデアは、求められているに見合う質と量を収集・集約できているのか？多様な声をどう集め、どう規制緩和などの行政支援に結びつけばよいのか？

「問題を引き起こした同じ枠組みではその問題は解決できない」^(*1)

このアインシュタインの言葉を引くまでもなく、変化・変革・改革を立案することは難しい。変化・変革・改革となる前のその意見やアイデアは、既定のそれ以外すべてであり、常識化される前の未常識であり、オーソライズされる前の例外、すなわち、現状における少数意見、マイノリティ・アイデアであるからだ。

田坂逸朗は、10年にわたって地域ほかさまざまな話しあいの現場でファシリテーターを務めてきた。それらの話しあいのうち少なからぬ数のものが、合意形成や集団の意思決定に際してという以前に、何を話しあっておくべきかを話しあっておく、という性格のもの、さらには、意思決定や合意の際の選択肢となる「将来における選択肢の列挙」ともいうべき性格の意見収集を目的とするものであった。

近年はその傾向が特に顕著で、これは、ファシリテーションの技法や対話の手法が普及、あるいは確立されていくにつれ、対立を解消するための対話や最終結論のための合意のみならず、その前に、どこから手を着けるべきかわからないものへ立ち向かうための話しあいにも援用が広がったことに起因していると言えるだろう。その大きなトレンドに関する考察は別の稿に譲るとして、ここでは、とりわけ「どこから手を着けるべきかわからないものへ立ち向かうための話しあい」が、ヒアリングの形を取って意見収集・アイデア収集される事例をケーススタディしながら、「イノベーション」に活用可能なファシリテーションのいち

活用対象としての「協創的なヒアリング」について考察してみたい。

それは、ひいては、イノベーション、特に地域イノベーションにおいて、それをどう促進していくか、そのヒアリング手法の確立の過程を通して、未来創造のためのファシリテーションという、新しいファシリテーションの援用分野で社会に有用性をもたらす一助となるだろう。

2. 3つのディレンマ～イノベーションを前にして

聞きたいものほど聞くことが難しい、と聞く側が思っているとき、言う側も、言いたいことほど言えていない、と思っている可能性が高い。当事者は当事者であるがゆえにすべての要望や意見を言語化できており、足りないものは調査の機会だけなのだろう、と見て取ったとき、あるいは、調査主体を透明な存在と見なして、当事者は調査に際して純粋に思うところを吐露できる、と見て取ったとき、調査主体は、思わぬ落とし穴に陥る。

当事者は言いたいことが特定できていず、調査主体を透明な存在とも思っていない。ことが重大なときほど、それは顕著で、ただしそれは、調査に不満があるなどして、何も隠し事をしているというわけではなく、当事者であるがゆえになかなか自身では言語化できず、意見を求められても真意を伝えきれないもどかしさに、当の当事者こそ困惑している、と見て取るべきケースが多々見られる。

さらには、対面アンケートやグループインタビューなどの、接点の精度を上げるだけでは不十分で、それどころか、「ランクの力」が作用し、意見を述べられる絶好の（あるいは、希少な）機会とみなして必要十分な回答以上の「要求」をしてしまうことも、被災者調査などの困窮者へのヒアリングの現場ではしばしば見受けられてきた。かといって、言語化を助ける目的で、言葉数を増やし質問内容などを具体的にしてみると、誘導性を加味してしまうことになり、意見そのものが変節してしまいかねない。選択式アンケート設問の選択肢の列挙にも、もうそれだけで誘導性があり、細心の注意が必要なことは社会学調査では多く語られてきた。では、どうしたら、心から欲する必要性の高い意見を、しかもイノベーションと言えるような社会改革のための建設的意見を、的確に負荷なく迅速に収集できるだろうか？当事者すらが言語化できていないものをどう引き出せばよいだろうか？

この、当事者すらが言語化できていない、心から欲するイノベーションのための必要性の高い建設的意見を、的確に収集する際のディレンマは3つあると規定したい。

ひとつめは、たとえば、被災者の支援に関する的確な要望意見を求める場合における、[その被災当事者すらがどこから手を着けたらよいかわからないようなとき、誘導してでも、意

見合成すべきか、もしくは、誘導せず、非侵襲性をもって引き出すことは可能か]である。

第6章で、東日本大震災復興支援財団が行った2012年4月から6月にかけての「福島県避難者支援ヒアリング」をケースとして取り上げながら、その、対話型ヒアリング、協創的意見収集の実際について考察する。

ふたつめのディレンマとして着目したいのは、[ビジョンはあるが、具体はない]、である。

組織や集団がビジョンを掲げて行動を統一し未来に向かうとき、しばしば起きるのは、総論賛成各論反対、ビジョンとしての大枠は賛成だが、具体になかなか共有性をもってその意見を提示することができない、あるいは、ビジョンの正当性に阻まれて、各具体論が矮小に見えたり些末に感じられたりして、なかなか意見表明を活発化しにくいというケースに見られるディレンマである。ビジョンが先にあるとき、具体は挙げづらくなり、具体が先にあるときビジョンにそれはまとめにくい、というものだ。ビジョンの組織（集団）全体への浸透を図る場合、組織（集団）外への普及を図る場合、そのビジョンに対するヒアリングをどう行えば、建設的に、ビジョンと、具体を体現する場である現場や普及対象の持つ意向と統合していくことができるのか。このディレンマを乗り越えたとき、当事者たちがビジョンを具体として言語化、再構築でき、イノベティブな意見を的確に収集する目的が達せられる。

東日本大震災を受けて、その1年後に福島県双葉郡8町村会において策定された「双葉郡教育復興ビジョン」に沿っての新しい教育づくり・学校づくりが、2013年にはじまろうとしたときの地域対話の会議におけるケースを、このディレンマ事例として第6章で考察する。この「教育復興ビジョン」に謳われたビジョンは総論的、理念的なものであり、では具体にはどんな教育を行うのか、どんな学校にするのか、地域や実際の学校運営者、教師、児童・生徒などとともに話しあう必要は認識されていたものの、ビジョンと現場の具体性になかなか接点が見いだせず、実際の当事者たちとの話しあいでは、対話型ヒアリングの形を取ることが重要であった。

3つめのディレンマは、ヒアリングが対象とする対象者に関するもので、たとえば地域の将来像やイノベーションのアイデアのような、現状の延長線で考えるよりむしろ、それとは違った枠組みで事象を扱いたいとき、現状に詳しい当事者にヒアリングすれば多くの意見が収集できると考えられるが、収集本来の目的であるイノベティブな意見としての的確に現状の枠組みを超えて言語化してくれるかどうか疑わしく、逆に、現状に詳しくなければ、どんな点がイノベティブか、何が新しい枠組みに基づくものなのかが判断も表現もしづらい。つまり、[現状に詳しくればイノベティブでなく、イノベティブであろうとするなら現状と乖離した意見となってしまう可能性が高い] どちらもヒアリング意見として活用

し難いのではないか?というものだ。

戦略立案推進の実務者が、対象者にヒアリングを行った際に「障壁の緩和の障壁」として浮かび上がってきた各要素について、東京都の国家戦略特区推進に関する意見収集プロセスを立案する任にあった実務者との面談（意見交換）の内容からこのディレンマを含むケースを考察する。

3. どうやったら、未来が引き出されるヒアリングとなるか?

[当事者すらが言語化できていないものを引き出すヒアリング]で、[ビジョンと具体を結ぶヒアリング]で、かつ、地域の将来像やイノベーションのアイデアなど[現状に即していながらにしてイノベティブな意見が収集できるヒアリング]。これが、ファシリテーションを活用することで目指したいヒアリングである。3つのディレンマは各個に存在するのではなく、ひとつのディレンマの3つの側面である。それは、[どうやったら、未来が引き出されるヒアリングとなるのか?]である。

ここでは、統計的な多数派意見の列挙をヒアリング結果とすることは意味をなさない。まだもたらされていない未来が、ヒアリングによってその萌芽として垣間見えるのならば、求めたいのは、見出し拾い上げる側に能力が要求されるような、見立て前の原石である。期待する文言は以下の条件を満たしている必要がある。

- (1) 新しくあること
- (2) 具体的であること
- (3) 本質的であること
- (4) 将来において常識となる可能性があること

それまでなかなか言葉化されていなかったとしたら、新しい意見、誰も思いつかなかったアイデアとして扱われるとしたら、それはすなわち、イノベーションがなされる前のマイノリティな意見・アイデアである。ここでのヒアリングは、統計学的に真値に近いものを、と回帰的な、あるいは平均的な多数派意見を求めるのではなく、有意の具体意見・アイデアを広く多様に求める必要がある。平準的趨勢（現状）把握のためのヒアリングから、イノベーション（創造的革新）の可能性を模索するためのヒアリングへ、との枠組みの止揚が肝要である。

そこでは、ヒアリングが、流れや過程を持つものであることが望ましい。当事者ひとりの中で結論化された意見やアイデアより、なかば偶然の力も借りながら、複数の当事者間の

会話の応酬を通して徐々に形成され浮かび上がり気づきを得た言葉にこそ真意と新味性がある。

そのヒアリングは、複数の当事者間の「対話」によってなされる。対話によって、[当事者すらが言語化できていなかったもの]が引き出され、[ビジョンと具体]が結ばれ、かつ、[現状に即していながらにしてイノベティブな意見]が合成され、はじめて収集可能となる。

4. 引き出すということ、促すということ～ファシリテーション

ファシリテーション^(*2)はこれまで多くの分野を対象としてきた。引き出すということ、促すということ、構造化し可視化するという、行動へと導くということ。教育研修、芸術、会議、集団の意思決定、さまざまな場面で、人と人の関わりあいの支援を通じて、「集団の知的相互作用」を促進してきた^(*3)。内容より関係性や過程に着目しながら、得られる解を、高度かどうかではなく、集団構成員の納得性が得られているかどうかで判断し、知的相互作用の成果としての行動化に着目してきた。

であるならば、ファシリテーションはまた、その創造性において、意見収集の「対話型ヒアリング」においても有効である。

ヒアリングにおける調査主体と対象者の関係が、図1(a)もしくは、(b)であるなら、対話型ヒアリングは、(c)のように2段階を経るものである。

- (a) 調査主体が、個別に対象者ひとりひとりにヒアリングを行う。
- (b) 調査主体が、対象者複数名にヒアリングを行う。

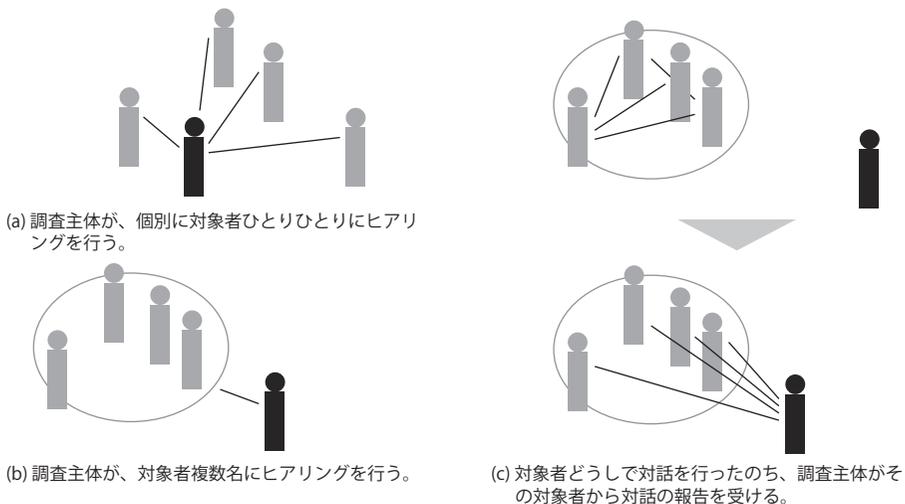


図1

(c) 対象者どうしで対話を行ったのち、調査主体がその対象者から対話の報告を受ける。

このときの対話をじゅうぶんなものにするために、調査主体はファシリテーターを置くなどしてファシリテーションを導入し、調査が対象者と直接をなすものではないよう配慮する。対話には、ワールドカフェ形式^(*4) や OST 形式^(*5)、AI 形式^(*6)、ストーリーテリングカフェ形式^(*7) などのホールシステムアプローチ^(*8) と総称される形式を用い、かつその投げかけや質問においても、誘導とならないよう配慮する。

対象者が少人数の場合は、ホールシステムアプローチでなくとも、ファシリテーターが進行する話しあいを対話的に進めるなら対話型ヒアリングと呼べる。ただし、対話を越えてディスカッション（議論）とならないよう、ファシリテーターのガイドには細心の注意が必要である。

対話ののちは、たとえばワールドカフェ形式であるならハーベストと呼ばれるセッションにおいて^(*9)、たとえば OST 形式であるならイブニングニュースと呼ばれるセッションにおいて^(*10)、調査項目のヒアリングを行う。

ここで得られる回答は、対話を通したのものとして、対象者が1問1答のヒアリングでは得られない「気づき」に基づくものとなっている。

- (1) 対象者が調査の事象と向きあう時間を過ごす（熟考性）
- (2) 対象者が対象者どうしの会話によって冷静な考察を経る（多様性）
- (3) 対象者が少数意見の存在価値を認識する（共感性）
- (4) 対象者が体験を発言することの中から意味を発見する（意味性）
- (5) ときとして対象者どうしの意見の合成で建設的な意見が生まれる（漸進性）

ファシリテーションが導入された対話型ヒアリングは、話しがたかったことが話せるようになる、ある種の開示性をもたらす。開示性は、さらなる開示性を喚起し、そのことによって得られた自己の発言に有用性を感じることが、ヒアリングの深度を増さしめる。この意味において、「地域イノベーションを促進する協創的ヒアリング」とはすなわち、ファシリテーションによる対話型ヒアリングにほかならない。

5. ジョハリの窓と未来創造

ジョセフ・ルフトとハリー・インガムの「対人関係における気づきのグラフモデル」、いわゆる「ジョハリの窓」(1955) は、コミュニケーションにおける自己の公開性について多

くを示唆している。各象限は、対話型ヒアリングにおける対象者の発言内容の種別でもあり、創造を待つ未来の種別でもある（図2）。

ここでは、「開放の窓～公開された自己」（open self）、および、「盲点の窓～自分が気がついていないものの、他人からは見られている自己」（blind self）は、対象者が気づいているか気づいていないかの違いはあれ、すでに社会が備えている意見であり、その社会の常識に基づく延長線的未来に見立てられる。

「秘密の窓～隠された自己」（hidden self）は、社会常識とは違う未来を想起したときの対象者としての態度であり、発言を控えている状態、さらには、明示されないがゆえに創造に活かされない未来に見立てられる。

「未知の窓～誰からも知られていない自己（unknown self）」が対話型ヒアリングが生み出したい発言であり、まだわかっていない創造的未來の見立てである。

意見として個人の中で確固として形成されたものだけを吸い上げていても、「開放の窓」をなぞるだけであり、対話によって「盲点の窓」や「秘密の窓」を行き来しながら「未知の窓」へ向かう場を創出しなければ、真のイノベーションはもたらされない、というのが対話型ヒアリングからの見立てである。

冒頭で示した3つのディレンマ、[当事者すらが言語化できていないもの]、[ビジョンと具体を結ぶもの] [現状に即しているがらにしてイノベティブな意見、これらはすべて、「未知の窓」にあり、それは、「盲点の窓」と「秘密の窓」とを行き来する、対象者相互の対話

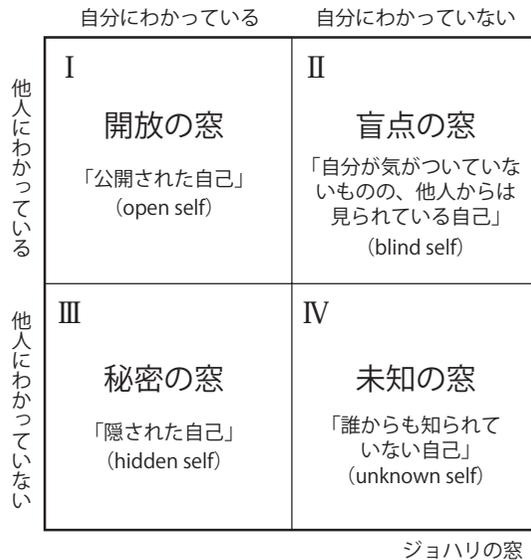


図2

によって開かれる窓である。

6. 3つの対話型ヒアリングの現場から

6-1. 避難者がほんとうに求める支援をヒアリングで引き出す

東日本大震災復興支援財団「福島県避難者支援ヒアリング」

3.11東日本大震災から13ヵ月後、被災者なお34万人が避難をする中（当時）、公益財団法人東日本大震災復興支援財団は、福島県の避難者を対象に「避難者ヒアリング」を行った。県内の、あるいは県外の避難者にはどんな支援が必要なのか。ヒアリングは対話型ヒアリングとして、ワールドカフェ形式で行った。南相馬市、浪江町、福島市、いわき市、ほか県内10箇所、札幌市、山形市、新潟市ほか県外5箇所、避難中の被災者各会場約40名を対象者として、「これからの支援、ほんとに必要な支援」について調査を行った。

ワールドカフェでの対話を通じて得た「支援に関する要望」を調査シートに記入、対話前には気づけなかった、あるいは書くことができなかった要望が多く集まった。対話には順序がある。「これからの支援、ほんとに必要な支援」という調査目的の問いの前に、序盤では、現実に向きあう問い「残念な支援、誇らしい支援」というテーマでの対話の時間を設けた。自分はどう現実と向きあっているかを他者に語ることは、自分に気づき直しをするプロセスでもある。それを経たのち「これから」という未来を想起する問いに移行した。

避難中の被災者としてどんな支援を望んでいるのか、というのは一見単純な質問のようだが、当事者だからといってすぐさまこの問いに答える用意ができていないわけではない。ディレンマ「当事者すらが言語化できていないものをどうヒアリングするのか」である。「これからの支援、ほんとに必要な支援」に関するていねいな対話から、対象者自らが、自らの望みに気づいていく。東日本大震災復興支援財団はこの調査に基づいて、支援メニューの見直しを行った。

6-2. ビジョンと具体を結ぶヒアリング

福島県双葉郡教育復興に関する協議会「双葉郡教育復興ビジョン子供未来会議」

福島県双葉郡の大半が警戒区域（帰還困難区域・居住制限区域・避難指示解除準備区域）として立ち入りが禁止される中、中学生・高校生は、仮設避難先の仮校舎に通ったり、個別の避難先へ臨時的転校をしたりということを余儀なくされている。その中で、2012年、復興のシンボルとしての新たな学校づくりを、と「双葉郡教育復興ビジョン」が策定された。このビジョンは、2015年度新設中高一貫校開校を目指しているが、実際には、既存の高校は5校ともサテライト校という形で双葉郡の域外に仮設されており、新設校と同時に、既存の中

学校が中高一貫連携校として現地に於ける通学再開となるなら、進路の選択肢が増えることとなり、ビジョンの具体化には、地域やステークホルダー（利害関係者）である学校関係者、当事者としての児童・生徒の意見が重要になる。そこで、対話型ヒアリングを行った。2012年度から2013年度にかけて、会津若松市、いわき市などサテライト校のある立地地域で5回、小学校・中学校教諭、PTA などステークホルダーごとに3回、行った。

対話ヒアリングは、「会議」として、ワールドカフェ形式で行った。ワールドカフェにおける各テーブルでの対話の成果は、OST形式の即席の分科会でより深め、参加者意見として、ファシリテーターがまとめた。対話でのひもときが、分科会で、ビジョンの是非や改良点といった即応的なものを越えて、未来を共に作る建設的な具体の意見として収集された。異なる意見が輻輳する中、また、ビジョン策定が密室で勝手に行われたとの疎外感を持つ当事者が多数いる中、その対立を越えるため、特にワールドカフェ序盤では、話しやすいよう同じ立場どうしのテーブル席次として開始し、席替えによって他のステークホルダーと徐々に話せるようにしていくような漸進的なプログラムとした。話せるようになってから話す。対話はタイミングである。

ビジョンが理念を謳うも、具体にはどんな学校を、どんな教育カリキュラムのもとにつくるのかがなかなか話しあいがたかった状況を越えて、地域とともに具体化していく流れを持つに至った。[ビジョンと具体を結ぶもの]をヒアリングした事例となった。

6-3. 「現状に即していながらにしてイノベティブな意見」を引き出すために

東京都国家戦略特区推進に関する意見収集プロセスについてのワーキング

国家戦略特区として選定された6つの特区のひとつ東京都は「東京発グローバル・イノベーション特区」を提案している。国家戦略特区は、国際競争力強化のため経済・社会の構造改革を重点的に推進する経済活動拠点として国が定める区域であるが、この構造改革のための、具体的な規制緩和のアイデアを各経済主体から意見募集する目論見において、しかし、どんな声をどう集め、どう行政支援を行えばよいのか？ イノベーションを促進する規制緩和施策に関するヒアリング手法を模索するワーキングの席では、「障壁の緩和の障壁」との言葉も聞かれた。

福岡市は、国家戦略特区を「創業のための雇用改革拠点」と提案しており、このための、創業や新しい挑戦、イノベーションの障壁となっている規制を緩和する市民との対話を開始している。福岡市が創業に特化しようということに比して、東京都は、既存のビジネス主体も含んで、「グローバル・イノベーション」と表現している。このため、既定の規制制度に合致させてきた経済主体と、改革後の規制なき競争を望む創業者の、両方に対応しなければならない。規制がもたらしてきたのは、制限性、と同時に、保護による安全保障性。それを

乗り越えるヒアリングがいまだできていず、新たなアプローチが迫られている中で行われたワーキングでは、「対話型ヒアリング」へと移行することが模索されることとなった。

既定の経済主体と新規創業者がともに対話する場から、自陣のみに有利な規制緩和策を越えた、「未知の」規制緩和策を掘り起こす。これから、その目論見に基づくグローバル・イノベーションのための対話型ヒアリングが実施されることで、「現状に即していながらにしてイノベティブな意見」の収集が可能になることが期待される。

7. ヒアリングをひとつの集団の知的相互作用であると捉えて

ヒアリングに対話を持ち込むとき、その場は、ひとつの集団を形成する。同時性、共時性を持つその集団では、対象者は多様性と共感性を同時に感受することになる。さまざまな意見があり、かつ、自身の意見と同じ意見の人が存在している、と。その世界観の獲得はやがて、意見どうしが相互に作用しあい、見ようとしなかったものに向きあう率直さを得たり、隠されていた思いを叙述できるようになったり、また、新たなアイデアを獲得したり、と、相互に触発されて個々人が考えを前進させる。

アニータ・ブラウンとデイビッド・アイザックスは、『ワールド・カフェ』の中で、「共に考えるための人間らしい方法とは、真の会話をするることなのです」と述べている^(*11)。あらかじめ持っているものを引き出し、状態を把握することが、通常のヒアリングの目的であるなら、「対話型ヒアリング」の目的は、この「前進性」「先駆性」「自覚性」にある。あらかじめ持っているものの集合的な描写では立ち向かえないときの、調査者と対象者の共同作業でもある。どうしていいかわからないものに立ち向かい、対話から個々人の思いを自覚する、対話から具体を合成する、対話から新たな事象に気づく、深く掘るヒアリングである。

ここに、ファシリテーションが旨としてきたものに加える、もうひとつの援用分野があるのだ。いわば、未来づくりのファシリテーションである。

8. 流れなきに流れをつくり作用を生むファシリテーション

作用を生むには、流れが必要である。集団が会話によって相互作用を生むには、そしてその成果の質を上げるには、その集団が流れを認識する必要がある。作用は流れの中にある。流れが認識できないとき、岩のように何もかも動かしがたいという閉塞感を感じる。とりとめのなさ、とらえどころのなさを感じる。ファシリテーションがもたらす同時性の、共時性の場が、ひとつの、あるいは複数の流れを認識させるとき、その場への関わりから「手の付けどころ」を発見する。

そのためには、ファシリテーションは、認識可能な流れを生む必要がある。流れは、個々人の感覚に根ざすさまざまな角度からの感覚描写が会話を経て重層していくことによって生まれる。特に第6章で取り上げた事例では、ひとつのグループが会話を直線的に続ける単一の対話に比して、たびたびの席替えによって会話が重層化するワールドカフェのような複線化した対話こそが、流れを生むファシリテーションにはより有効であった。

9. トンネルを両側から掘る

現在を延長線でのばした先に未来があるわけではない。特に、起こしたい「イノベーション」とは不連続にあえてなす未来である。地域イノベーションのみならずイノベーション全般にとってこれは重要である。統計的な多数派意見の列挙に意味がないのではなく、それはそれとして、不連続に未来を想起する発言の訪れを待つファシリテーションとは、イノベーションが生まれる可能性を増大させたいという意志の体现である。そしてその発言の訪れ、誰も思いつかなかった意見・アイデア、すなわち、イノベーションがなされる前のマイノリティ意見こそ、イノベーション後を垣間見せる未来からの発言である。

「私たちがまだ答えをもっていない純正の質問は、革新へとつながる招待状のようなものです」(アニータ・ブラウン)

現実側からの掘削と、未来側からの掘削。トンネルを両側から掘り、現在を未来に貫通させる。それが、対話型ヒアリングのメタファーである。

10. おわりに～地域イノベーションを促進するもの

2012年8月、大規模なものとしては日本初となったDPが行われた。DP(討論型世論調査)は、アンケートに際して対象者が話しあいを行う対話型の世論調査である。「エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査」として、「革新的エネルギー・環境戦略」策定に先立って行われた。(運営：慶應義塾大学DP研究センター)

これもひとつの、未来づくりに「対話」を活用するファシリテーションのあり方である。

情態のヒアリングから、有意の具体を抽出する動態のヒアリングへ。現状把握のヒアリングから、イノベーション、すなわち創造的革新の可能性のためのヒアリングへ。ファシリテーションが、次のステップを用意しようとしている。

地域にイノベーションを起こすには、「規制の緩和」(環境の整備)とともに、「共同の促進」

「チャレンジの奨励」も必要で、この3つは同時でなければならない。対話型ヒアリングにさらなる考察が必要だとすれば、それは、この、「対話型ヒアリング」にはじまるファシリテーションは、いかにして共同を促進するか、チャレンジを奨励できるか、ということであり、これからこれらについて検証していきたい。

最後に、ファシリテーターとしての役どころをいただいた、公益財団法人東日本大震災復興支援財団の専務理事荒井 優氏、文部科学省生涯学習政策局の南郷市兵氏、NPO 法人世界連邦21世紀フォーラムの木戸寛孝氏に謝辞を述べたい。

注

- * 1 世に喧伝されているアインシュタインの箴言。ここでは、C・オットー・シャーマーの引用による(2010, 『U理論』)
- * 2 フラン・リースはファシリテーションを「リーダーシップの一形態」で、「グループのメンバーを鼓舞し、誘導し、参加を促して、創造性や当事者意識、生産性を引き出す」とことと定義している(2002, 『ファシリテーター型リーダーの時代』)
また、中野民夫は、「簡単には答えの出ない問題について問い合う場を作り、対立する集団や個人の関係をできるだけ容易にし、切れてしまった関係のみならず、人と社会、人と自然の世界をつなぎ直し、一人ひとりの存在、経験、知恵を引き出し、バラバラではできなかった相乗効果を促し、励まし力づける」としている(要約：田坂逸朗)(2003, 『ファシリテーション革命』)
堀 公俊は「集団による知的相互作用を促進する働きのこと」としている(2004, 『ファシリテーション入門』)
津村俊充は「関わり方のひとつ」で、「個人やグループの気づき、成長(変化)に関わり、“学習”を援助促進すること」としている(2010, 『ファシリテーター・トレーニング』)
- * 3 堀 公俊は、ファシリテーションの応用分野は6つとまとめている(2003, 『ファシリテーション入門』)。6つは、教育研修、体験学習、自己表現、自己変革、問題解決、合意形成、である。
- * 4 簡単な手順でリラックスした雰囲気をつくり、自由に意見が出しあえるようにする話しあいの形式。参加者を小グループに分け、たびたび席替えを行い偶発性を喚起する。アニータ・ブラウンとデイビッド・アイザックスが創始した。(2007, 『ワールド・カフェ』)
- * 5 輪になってテーマ出しを行い、自己組織化された即席の分科会を立てる話しあいの形式。主に課題解決に用いられる。ハリソン・オーエンが創始した。(2007, 『オープン・スペース・テクノロジー』)
- * 6 相互インタビューを皮切りに、過去の成功体験に主体性と組織力を加味してゆく話しあいの形式。ダイアナ・ホイットニーとアマンダ・トロステンブルームが創始した。(2006, 『ポジティブ・チェンジ』)
- * 7 小グループに分かれてひとりずつが「ストーリー」ということばに仮託して発言し、聞き手がその話題の中から有意な事象を取り出す、聞き手に着目したワークショップの形式(2009, 香取一昭『決めない会議』)
- * 8 関係するステイクホルダー(利害関係者)が一堂に会して話しあう話しあいの各形式の総称。場づくりを重要視しながら、ワールドカフェ形式やAI形式など、自発的な対話、重層的な対話を通して未来に向けての立案を行う。(2011, 香取一昭『ホールシステムアプローチ』)
- * 9 ワールドカフェ形式においてその終盤、対話の成果を明示的に集約する時間枠を「ハーベスト(収穫セッション)」という。
- * 10 OST形式においてその終盤、対話の成果を各分科会が報告する時間枠を「イブニングニュース」という。

*11 2007, 『ワールド・カフェ』

参 考 文 献

- C・オットー・シャーマー 『U理論』 英治出版, 2010
ピーター・M・センゲ 『学習する組織』 英治出版, 2011
フラン・リース 『ファシリテーター型リーダーの時代』 プレジデント社, 2002
中野民夫 『ワークショップ』 岩波書店, 2001
中野民夫 『ファシリテーション革命』 岩波書店, 2003
堀 公俊 『ファシリテーション入門』 日本経済新聞社, 2004
津村俊充 (編) / 石田裕久 (編) / 南山大学人文学部心理人間学科 (監修) 『ファシリテーター・トレーニング』
ナカニシヤ出版, 2010
デヴィッド・ボーム 『ダイアログ』 英治出版, 2007
エドガー・H・シャイン 『人を助けるとはどういうことか』 英治出版, 2009
アダム・カヘン 『未来を変えるためにはほんとうに必要なこと』 英治出版, 2010
アニータ・ブラウン / デイビッド・アイザックス / ワールド・カフェ・コミュニティ 『ワールド・カフェ』
ヒューマンバリュー, 2007
ハリソン・オーエン 『オープン・スペース・テクノロジー』 ヒューマンバリュー, 2007
ダイアナ・ホイットニー / アマンダ・トロステンブルーム 『ポジティブ・チェンジ』 ヒューマンバリュー,
2006
香取一昭 / 大川 恒 『決めない会議』 ビジネス社, 2009
香取一昭 / 大川 恒 『ホールシステムアプローチ』 日本経済新聞出版社, 2011
フィリップ・コトラー / ナンシー・R・リー 『ソーシャル・マーケティング』 丸善, 2010
フィリップ・コトラー 『コトラーのマーケティング3.0』 朝日新聞出版, 2010
森 政弘 『機械部品の幕の内弁当』, 2003
池田信夫 『イノベーションとは何か』 東洋経済新報社, 2011

Summary

Research of the “Collaborative Innovation Hearing”
which facilitate the Local Innovation

—— Facilitation for future creation ——

Itsuo Tasaka

“Facilitation” is trying to prepare the next step of the “hearing”. From the hearing of stopped motion, the change to hearing of concreteness and liveliness. From hearing to understand the current situation, to the growth of the “innovative” hearing.

In this paper, I described the three dilemma of hearings, for the three cases.

This research of new facilitation field, leads to usefulness to society. Innovation, especially for local innovation, hearing technology is most important. The technology what is a new facilitation of future creativity.